

TOEIC と英文法

立石 博 紀

(関西大学外国語学部非常勤講師)

TOEIC (トイーック)とはTest of English for International Communication の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテスト。10点から990点までのスコアで評価される。

このスコアは、常に評価基準を一定に保つために統計処理が行われ、能力に変化がない限りスコアも一定に保たれている点が大きな特長である。世界約120ヶ国で実施され、グローバルスタンダードとしてコミュニケーション能力を正確かつ総合的に評価できるとともに、世界各国のさまざまな企業、学校、団体に、さまざまな用途・目的(自己啓発や英語研修の効果測定・海外出張や駐在の基準海外出張や駐在の基準・英語課程の単位認定基準等々)で幅広く活用されている。

TOEICテストは米国にある非営利テスト開発機関である Educational Testing Service (ETS)によって開発・制作され日本におけるTOEICテストの実施・運営は(財)国際ビジネスコミュニケーション協会が行っている。

TOEICテストは、リスニングセクション100題(4つのパート)とリーディングセクション100題(3つのパート)から構成されており、「英文法」という観点からは、パート5の「短文穴埋め問題」とパート6の「長文穴埋め問題」が特に英文法力が問われているか考える。

それでは、どの程度の英文法力が問われているかという点については、私見ですが(特にETSとしての公式の見解が見当たらないので)中学の基本文法がしっかりと身につけていれば解ける問題もかなりあり、高スコアを得るためには、やはり高校(一部、大学)レベルの英文法力が要求されているかと思う。

従って、極端に高度な、難解な英文法力は要求されていないと考える。内容的には、ビジネスにおいて求められるであろう「英語コミュニケーション能力」を測定するために必要な英文法力を問われている。

< 例 > (パート5 短文穴埋め問題)

* Sales of Fonseca electronic equipment have been increasing steadily

[(A) from (B) toward (C) by (D) over] the past five years. → 正解は D

* The loan application process at Palau Bay Bank is very _____

[(A) efficient (B) efficiency (C) efficiently (D) efficiencies] → 正解は A

次に英文法についての私見を述べてみることにする。

「英単語(含む、熟語・慣用表現)」と「英文法」の関係は、→「食材」と「レシピ」の関係に似ていると思う。つまり、美味しい料理を作るためには、トマト・キュウリ・ナス・野菜・米・卵など

様々な種類の「食材」があればあるほど、また、それらをいかに組み合わせて料理をつくるか「レシピ」が必要になる。

どんなに英単語を数多く覚えていても、その単語と単語をいかに組み合わせて、ひとつの文章に作成していくかの文章構成能力（英文法力）がなければ、正確に・明瞭に・簡潔にコミュニケーションを図っていくことは困難となる。

過度に英文法を重視し、正確さを求めたりすると自由なコミュニケーションの妨げになるとのご意見がありますが、私は、学習者のレベルに応じた英文法の指導が必要なのではないかと考える。

初級者に対しては、中学の英文法の習得でよろしいと考えるが、グローバル時代の中で、まさにビジネスの第一線で活躍するビジネスパーソンにとっては、TOEIC900点レベル（Reading Sectionで425点レベル）は必要かと思う。上記のレベルに到達するには、かなり高度な英文法力を必要とするかのような印象を与えるが、中学～高校（大学）にかけて十分に英文法の学習をされると達成可能だと思う。

英文法の知識がないと、正しい理解につながらないと常日頃痛感しています。

<富士山は日本で一番高い山です。>

Mt.Fuji is the highest mountain in Japan.

No other mountain in Japan is higher than Mt.Fuji.

No other mountain in Japan is so high as Mt.Fuji.

The higher we climb the mountain, the colder it becomes.

→ 単語を知っていても、比較級・最上級の形や、その他の文のスタイル・構成ができていなければ、正しくコミュニケーションが図れたとは言えないかと考える次第である。

誤解していただきたいくないのは、私は「英文法至上主義」を唱導しているわけではない。英語を聞くにしても、英語を話すにしても、英語を書くにしても、英語を読むにしても、「英文法」は直接・間接を問わず、コミュニケーション能力の向上に関連しているとの思いからである。そういう意味で、学習者のレベルに応じた「英文法力強化」の必要性を痛感している昨今である。

最後に、「英文法学習の観点」から、学校の英語教育に期待されるものについて、私見を述べたいと思う。

結論から申し上げますと、中学で学ぶ英文法、または高校で学ぶ英文法をしっかりと身につけられるような指導が求められているかと思う。

よく、日本人は、「英文法ばかり重視しているので、英語をしゃべれない」との声を耳にするが、果たしてそうなのでしょうか？

TOEICテストの結果からして、日本人はReading Sectionのスコアがあまり芳しくない。本当に英文法力があれば、もっと高いスコアを獲得できているはずだと思う。企業内でのTOEICスコアアップ講座の講師としての経験から、そのように痛感している。

それゆえ、中学・高校の英語の先生方におかれましては、「英文法」をしっかりと学生にご指

導いただければと願っており、「英語大好きな学生」が数多く誕生されることを心から願っている今日この頃です。

今回は、たまたま「英文法」を切り口にしたテーマのシンポジウムとなっていますが、日本人がこれからのグローバルな時代で活躍していくためには、小学校→中学校→高校→大学→企業での英語教育をどうすべきなのか（大学の英語の入試問題のコンテンツを変えていく必要はないのか？といった問題も含めて）について、文部科学省を中心に産・官・学一体となって「日本の英語教育」についての真剣な議論と実質的な運用が必要不可欠であると考えている。